

第6回「関西建築家新人賞」審査講評

2007年に第9回「関西建築家大賞」をいただいた縁で、今回審査委員長をさせていただくことになった。新人賞ということで住宅建築の応募が多いと思うのだが、私は住宅設計の経験がなく、審査委員としては私も新人であるため不安もあったが、若い設計者の力作を直に設計者と会って見ることができるという期待もあり、引き受けさせていただくことにした。そして構造家の立場で、多くの著名な建築家と協働し、多くの幅広いジャンルの建築構造設計を手がけている陶器浩一氏と、第1回「関西建築家新人賞(旧名称:JIA 近畿支部建築家新人賞)、そしてJIA新人賞も獲得している矢田朝士氏に審査員として加わっていただいた。

書類審査は2月28日にJIA近畿支部事務局のある綿業会館で行った。19点の応募作品から設計趣旨と図面、そして写真を見て慎重に検討を行った。やはり図面と写真ではなかなか判断が難しいところはあったが、審査員3人の討議の上、現地審査対象の4点を選んだ。現地審査は4月4日に行った。書類審査で写真を見て選んだ作品に現地で見るとがっかりさせられることもあると思うが、今回の4作品はいずれも素晴らしい力作で、じっくりと見せていただくところも多くあり、審査時間が少なく感じられた。

「十月桜の家 堀部直子氏」

周囲に対しては閉ざしながらも、十月桜を効果的に活かした中庭・テラスを設けて室内にさわやかに自然光を取り込んでいる。平面的には非常にコンパクトで機能的に910mmのモジュールを守りながら完成されている。またディテールも美しく収まっていた。ただ繊細でまとまりあるだけに力強さに欠ける部分、また工法や材料に主張がやや欠けるところが惜しまれるところがあった。

「相楽舎 青木泰憲氏」

図面と写真では読み取りにくかった良さが各所に見られた。設計趣旨にあるように「異なる工法と様々な材種や仕上げやテクスチャの混在」「木材の持つ素材表現の可能性」をよく追求している。実際多くのアイデアが建築にこめられていて感心させられるところが多かった。ただ知識の多さからか様々なことに挑戦しすぎているため、大きなテーマ性が不足していると感じられた。

「KI house 川村拓雄氏」

定年後の夫婦が地元に戻って暮らすための家である。建築は伸びやかでモダンによくまとまっている。ディテールや様々な仕掛けも興味深く、参考になるところも多かった。ただ大きなFIXガラスの窓と白いボード壁、黒のスチール間仕切りが繊細で現代的なだけに、ほのぼのとした田舎の風景に溶け込めない、なにか違和感を覚えた。

「Belly House 畑 友洋氏」

設計趣旨に京都市風致地区の都市景観統制のあり方に一石を投じるとあるが、そのわりには外観は平凡と感じた。それはそれでよいのだが、平面的には裏庭の植栽帯をもっと内部に取り込むことができなかつたのかという点は惜しまれた。内部は大木をイメージしたという合板表しのコア部分を中心に室が階段状に上がっていくという単純な構成で、螺旋状に連続する伸びやかな空間である。光に包まれた暖かい安らぎのある生活を感じとることができた。シンプルな住まいに未成熟な部分はあるが、オリジナリティと建築的な力強さ、そしてこれからの可能性が感じられる建築であった。

以上4点の現地審査を終え討議の結果、審査員全員が「Belly House」を推挙し、今回は畑友洋氏を第6回関西建築家新人賞に決定した。

今後も畑氏をはじめ、応募者の皆様がさらに優れた作品を作り上げていくことを期待する。

またこちらの指定した日時に住宅内を公開していただけるということは建築主と設計者の深い信頼関係が表れている。そのような関係を構築できたことは建築家として素晴らしいことだと思う。

また建築主の皆様にも深く感謝いたします。

審査委員長 江副 敏史

審査にあたり新人賞における評価は技量や完成度が不十分であっても、何か人を引き付ける強さのあるものを選びたいと思った。そして現地審査の対象作品は言葉や写真、図面から伝わる内容だけでなく、現場で体感して初めて判る何かを持つ可能性のあるものも拾い上げるようにした。これは本来建築家がモノづくりであり、言葉以上にその創りだすものが一番重要であると考えているからである。

「十月桜の家」は密集した住宅地に建つ 2 階建てのアトリエ付住宅である。外観はスマートで好感が持てた。唯一と言える開口からは桜の木が見え、道行く近隣住民に対して好ましい対応をしている。また内部も同様に空間構成・ディテール共に簡潔に全体を破綻なく巧く納められた作品だった。ただ、建物の空間構成やデザイン処理などには既視感が伴い、設計者自身の表現や思想を感じることが出来なかった。自邸という自己表現が最も純粹におこなえる機会にオリジナリティーのある提案がないことが残念であった。

「相楽舎」は地方都市の小さな町に建つ住宅である。敷地は都市部のように建物が建て込み周囲からの干渉が強い場所だった。建築を貫くべきコンセプトが弱い為、内部空間の組み立てが部屋毎に変化しており建築の持つ表現力を弱めていた。しかし居間の吹抜けの立体空間における造形や素材の扱いは上手く、この家の中心空間の質を高めていた。そのまま全体を纏め上げる事が出来ればより豊かな住空間が造れたであろう。

「KI house」の敷地周囲の環境はとても良く、建築の与条件も整い大変恵まれていた。緑に囲まれた風景の中に馴染むように素朴な外観の建物がそっと置かれていた。目の前に広がる林と小川に面する壁一面をガラス張りとし、そこに主要な部屋を並べ素晴らしい眺望を得ている。しかし、そこから望まれる外部はあくまでも見る為の景色から脱すること無く、建築空間との隔絶を感じた。また浴室や便所などが内外の空間と関係を持たず、いちパッケージとして計画されていたのが勿体無く思われた。施主が愛おしく思っているこの土地と建築空間との関係性を積極的に促すような提案があると、建物の存在意義も強まったのではないかと思われた。

「Belly House」は京都の新しく開発された地域の主要道路沿いにある。この家でのコンセプト内容は言葉の表現をかえると特に新しいものではなかったが、設計者の説明する解放的な空間(共有スペース)ともものかげの空間(個室)との関係は家族に安らぎを与える事に成功し、立体的には楽しさのある関係を作りだしている。ただ共有スペースがもう少し軽快さと内外の曖昧さを持つ事が出来れば設計者の意図がより強化されたであろう。また、プラン構成が住宅の長い時間に耐えうるだけの魅力を持ち続けるかは住まい手に頼る処であると思われる。

審査において全ての作品を通して感じたのは、創り出すもののオリジナリティーが弱い事であった。受賞の有無に関わらず今回の応募を機会に、自らの目指すものづくりのスタンスに磨きをかけて欲しいと思った。

審査員 矢田 朝士